



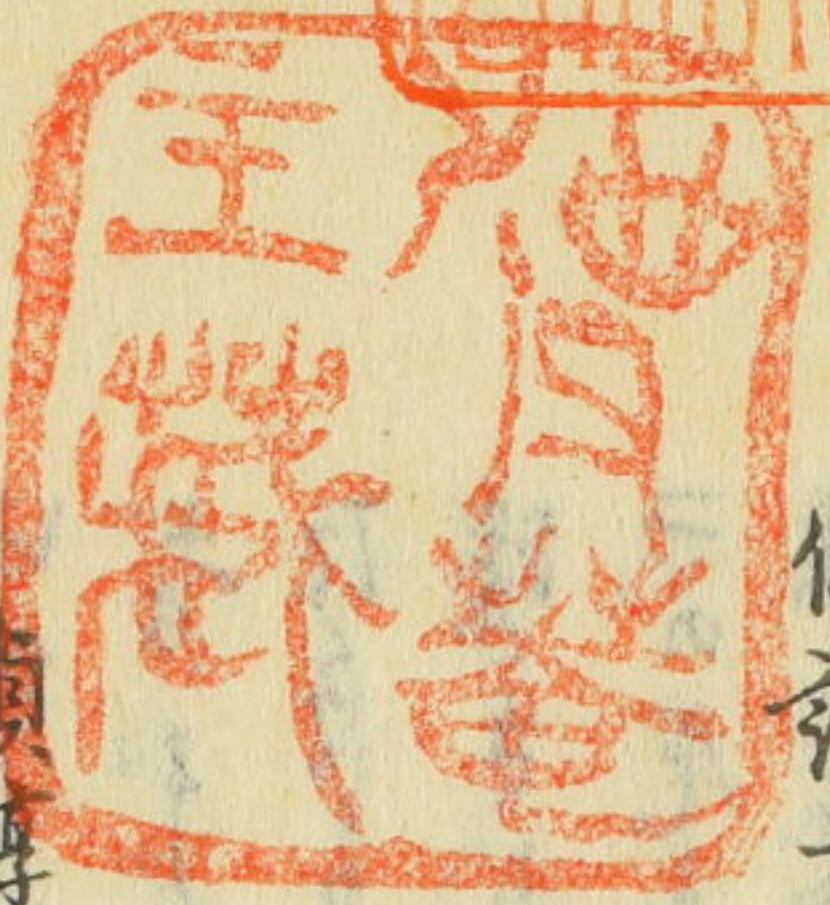
俛禮一系集

三

5  
2179  
3



門利  
號 2179



俳詠一葉集附合之部二

貞享元甲子冬

狂言本枯のよ六竹高子似るる可  
たそやとげしる空け山原花  
まゆのま水子海原似るる  
可しらねあやふふふ赤  
釣解のふそりすそふのふ山あふ  
白のふて（平）中平米を

古學庵俳号  
幻窓 湖中  
坎窩 久臧 校

翁  
野水  
若子  
重五  
杜因  
正平

ウ  
糸虎ハ海子ナリナリナリナリ  
髪ヲヤサシクシテ其ノカサハ  
偽レテハハハハハハハハハハ  
滑ル卒都婆ナリナリナリナリ  
カケテハハハハハハハハハハ  
何ハハハハハハハハハハハハハ  
田中ナリナリナリナリナリナリ  
昔ナリナリナリナリナリナリ  
ナリナリナリナリナリナリナリ  
味ナリナリナリナリナリナリ  
二ノ虎ナリナリナリナリナリ  
蝶ハハハハハハハハハハハハハ

水 五 翁 号 玉 号 水 五 翁 号 水 五 翁 号

二  
今ナリナリナリナリナリナリ  
ナリナリナリナリナリナリナリ  
志ナリナリナリナリナリナリ  
望メテハハハハハハハハハハハ  
何ハハハハハハハハハハハハハ  
鳥城ハハハハハハハハハハハハ  
あハハハハハハハハハハハハハ  
秋水一斗ナリナリナリナリナリ  
日東ノ李白ハハハハハハハハハ  
巾ナリナリナリナリナリナリナリ

号 五 翁 水 五 翁 号 玉 号 水 五 翁 号

三  
うしの糸糸よその夕ぐれ子  
箕子鮫北道をもいしき  
糸糸のつらさり星くもく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
廊のいふ後れうけはくく

野水  
杜國  
篇  
若子

海その月袖を福祿をひくく  
柳也をまお真徳の宿  
ゆきゆきゆきゆきゆき  
たくのまきまきまきまき  
床文を解けたいとくあり男  
縁さかたけのくくくくく  
口をくくくくくくくくく  
ゆきゆきゆきゆきゆき  
小のちりさささささささ  
白くくくくくくくくく人  
魂あひのかくくくくくく  
くくくくくくくくくくく

重五  
正年  
水  
篇  
水  
五  
篇  
五  
水  
五  
篇  
五  
水  
五  
篇

初也の妻とや嫁仕の女は  
先づくらお喜そかきゆき  
二 椀の餅すゆの室ののまら  
くゆき起上秋留も  
藤原く楯も柳の葎き  
之縁可らん不破の再人  
そすつ美濃さあつ其を志の  
解と先くはさつと七十  
なかめさう法事とまあ花の  
ひし門の傘のいこそくさ  
道はすけの子あふたまは  
まはつとつと存指を海

水 不 号 五 五 扇 五 水 扇 号 水 水

月子たつる白猫の髪の色は  
赤きぬ理臨海を 中川  
秋原はあつとあきく静さハ  
あつと静つとあつと中川  
秋より祝をひきき山可け  
ひきき興竹の扇の肉付可  
三ツのむ鶴鶴尾長けと軍  
くくくみくく越の指活

号 扇 水 五 扇 五 水 扇 号

杖をひききと中川  
はみくくと中川  
水もみゆくとあつと

杜園 重五

目録の巻を初於人のまゝあひま  
水の伊門を井一河けのま  
り事々様少少あやふ他のおうすみ  
り事のは若き一むゆをさしたんや  
ら〜けり物うむ娘う〜つあて  
燈籠ふ〜りす情う〜あふ  
ふみ糸の角方ら〜をえ〜をれけ  
きま〜ま〜一〜淡賀ふの切  
物月夜又ふあおぬ〜  
あや〜買〜る〜作〜き〜き〜  
え〜ふ〜の〜業〜〜〜能〜も〜代〜た〜  
高婦の果より米あんと〜す

野水 扇 扇 扇 扇 扇 扇 扇 扇 扇 扇

心静ま〜は浪のあり嵐れり  
佛一 咄〜の 魚け〜あ〜  
野中 町見二郎と傳りれり  
玉形す〜れ〜の〜け〜あ〜及  
〜〜〜〜〜  
古屋の〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
宮崎や名刺の橋の長あふ  
花〜子〜の〜柴〜あ〜け〜の〜い〜ん  
三十り〜を〜や〜く〜刀〜る〜年  
〜の〜根〜是〜ふ〜の〜筈〜  
〜の〜解〜り〜尺〜袖〜を〜と〜く

扇 扇 扇 扇 扇 扇 扇 扇 扇 扇

何と人を待たせしめし  
 けしめしめしめしめしめし  
 三日月の夜見くらしく  
 秋の風吹く時を待たせしめし  
 雲よよよ念仏の音も  
 新くもよよ新くもよよ  
 物もよよよよよよよよ  
 くれねよよよよよよ  
 母よよよよよよよよ

難波津の河に火くくく

玉 水 水 玉 水 玉 水 玉

すしけり

重五

人の影いを鏡に磨き  
 花を採る骨のやわたり  
 鳥のえりやわたり  
 風吹ぬ秋の白雁を  
 萩の磯を歩くと  
 加茂川や麻子代  
 いよよよよよよよ  
 鳥よよよよよよよ  
 くれね二十を  
 けしめしめしめしめしめし

花号 杜園 野水 了洞 羽堂 五号 水号 玉号

火をぬ火焼ふふ人をアハ  
門をよらぬ人法衣をアハアハ  
血口をくくくくくくくく  
先方下る本御の膝七ツ  
あまの御息所をくくくく  
花の枝梅の枝をくくくく  
信ものくくくくくくくく  
白蓋のくくくくくくくく  
宜者有りこくくくくくく  
八十歳をくくくくくくくく  
あまの御息所をくくくく  
西のくくくくくくくく

五号水五号水五号水五号水

あまの御息所をくくくく  
妹の家をくくくくくくく  
御瓶をくくくくくくく  
依り来り御息所をくくく  
つよみくくくくくくく  
子の御息所をくくくくく  
あまの御息所をくくくく  
あまの御息所をくくくく  
あまの御息所をくくくく  
あまの御息所をくくくく  
あまの御息所をくくくく  
あまの御息所をくくくく  
あまの御息所をくくくく  
あまの御息所をくくくく

五号水五号水五号水五号水



所へはあつたをせむ村向 小

田家賦呈

和月や静のつくし無ひは  
其のわたりあはれあつた  
櫻槍山家の傳は本葉傳  
ひよす。牛の培うはれつ  
音もあふ具足はのち  
酌とる音もあつたにいて  
秋の源流の湯を尋ねて  
ややくとれく不二尺ゆる寺  
病とる種の花のあつた

若年

翁

重五

杜園

羽笠

野水

翁

小

あつたをせむ村向  
和月や静のつくし無ひは  
其のわたりあはれあつた  
櫻槍山家の傳は本葉傳  
ひよす。牛の培うはれつ  
音もあふ具足はのち  
酌とる音もあつたにいて  
秋の源流の湯を尋ねて  
ややくとれく不二尺ゆる寺  
病とる種の花のあつた

五

水

笠

翁

五

翁

小

笠

水

翁

小

五

佛堂より送むるのみにて  
律より思寺の小角豆のむらりし  
萱原まきりに炭素つく白  
芥子尾の小坊まきり  
折る葉の窓まきり  
新さる飯基のまきり  
鳥井く狐風やまきり  
物林より根よりまきり  
豆鼓つらまきり  
元頭の子れ枝まきり  
体見木幡の旗まきり  
いふ海より男猫まきり

玉 水 筥 玉 篇 号 筥 水 玉

喜のまきりすれを掃きまきり  
あ干をまきりの聖わらまきり  
山草をまきり

玉 水 筥

同  
羽

いりまきり  
檜火まきり  
木城まきり  
椿まきり  
浪まきり  
いりまきり

松 号 玉 杜 野 水

同年臘月十九日

海客之野の春の日の白く  
串に鯨をとりし  
二百年来の山より斧取く  
櫛の舞まじく秋を来りし  
入月より懸けしきよのまじりて  
かきまよふ玉をながれし  
海客の心も母のまじりて  
一幅の草のまじりて  
棋の工丈二のまじりて  
月より降りし旅のまじりて  
雲をほらけしはるのまじりて

菊

桐葉 東藤 二山 紫 山 菊 紫 菊

華表をけしはるのまじりて  
笠をかきし衣の破れし  
秋の鳥の人をけし  
まじりて  
おくもる石の扇をけし  
美人のかしをけし  
城夷の碑をけし  
生海角をけし  
木をけし  
藪をけし  
ちりしと地味化し

山 紫 菊 山 紫 菊 山 菊

京子あきし 痛のましあひ  
 不二の根と望見するやうあう  
 痛のゆく都のひともあしむ  
 中らそら後を思ひひらき糖ひ  
 衣うらく小姓 赤の戸を 押  
 月匂くみ針のひきき八つ写る  
 根いそくきえこのの 衣  
 破れし 具足をもあし 踏つけ  
 子集の勢子とくけ 他り  
 紅衣のち紙子花のあを紋く  
 ちひそま言の承ふらひ 伽  
 赤色の新者志 標あひ未了

紫 山 翁 紫 庵 翁 山 翁 紫 山 翁 紫

赤子らしす 赤の標 赤

赤子のしきむありあふ 赤のしき  
 芝草くこしき 赤のやこ 芝

雷枝

赤のひきあしひらきあ 赤のひき  
 赤子しきふらき 標のちひしき

勝延

赤の標あし 拾ひむ赤紫あし

山

紫山

すききり雲の舞四十一

翁

雲をふかゆのうた松をまきや  
古人のやうにわが木のまきし

如行

翁

翁 夏波流のちこころをみれば  
松のまきをまきのちのやうに  
行一つにまき足はみゆ

桐葉

翁

志のまき松を解るるやうに

翁

志のまき松を解るるやうに

桐葉

志のまき松を解るるやうに  
志のまき松を解るるやうに  
志のまき松を解るるやうに

閑水

東葉

桐葉

志のまき松を解るるやうに  
志のまき松を解るるやうに  
志のまき松を解るるやうに

翁

桐葉

東葉

まろくろく垣わりの路にや  
ゆるゆる新をよもす月の光  
あつたハあつた志たつた船は

叩端  
如行  
工山

能作とて積りかき世よ義のま  
そのつれとて風を流す

木因

貞享二乙丑年

三月廿七又

河とをよむるや中下地一草叶

篇

海をよむる 垣わりの路に  
田原をよむ 妹の童のあつた  
よとあつた 女をよむ 中下地  
月とをよむ 秋の光のあつた  
酒のお嬢のあつた  
又とをよむ 女をよむ 中下地  
あつた 瓜をよむ 女をよむ  
あつた 女をよむ 女をよむ  
あつた 女をよむ 女をよむ  
あつた 女をよむ 女をよむ  
あつた 女をよむ 女をよむ  
あつた 女をよむ 女をよむ  
あつた 女をよむ 女をよむ

叩端  
桐葉  
篇  
編  
紫  
篇  
紫  
端  
紫  
篇  
紫  
端  
紫  
篇

燈火風をまのふ紅花  
川激ゆき撃と角に流るけき  
令利とく流る多口とくよ  
かこきく石の湯の花久し  
羽打千海をくく極や  
高よみく女を春おとくく  
枕 屏風の終り候とくみ  
中より枕一箇のいろえのきさう  
三股の舟は川の流れ  
危位やいしく杜律を味ひく  
花うすくあす竹をよのきさ  
いよと華一野ハ吹ををわひさく

端茶 端茶 端茶 端茶 端茶 端茶 端茶 端茶

水汲小俵油心やうき  
月あき少極くを流るん  
きハ夜塗の流るくいさ  
村中のそき流るくいさ  
いよ川鬼の瓜あふおと  
望尺ゆりハ舞とくらとく  
男やもたの志えおしき  
風くつき大寺の板の七つ  
海門を流るく生鯉の巻  
常盤山岩盤く助、おん  
あまの 流るまき海の流れ

端茶 端茶 端茶 端茶 端茶 端茶 端茶 端茶

同日

つゞくと枝のせみ袖しら  
ひくくまをいつも花の一家  
夕影山神の雛をたぐえ来  
清もろとすらくる柄杓の月  
わもいらきぬをこい箱のつの上  
言の去るを 持るをほら  
鼻残子おのまふまけ  
まう大波子三升の降きく  
まると徳海の流る袖と尺よ  
お痛くゆく野孔四五百のま  
お風のひくまき酒を飲草

桐葉

菊

叩端

黄口

東森

工山

菊

端

山

葉

口

佛もときさむ西谷の信  
鳥羽玉の髪きく女官をま  
急をも尺破るおのりの月  
秋ハ程只者お物くひく  
白子のたまえ糸糸方の海  
浪よゆうの鯨の骨を花裁く  
泣わゆう於幼のからくを子  
望持るを女子たぐくやき男  
玉守の塔のほくくまを  
鶯鈴の尾をゆの圃子柳きて  
風子ぬを置るゆの付死  
華もくく杯の度ぬを引枝め

庭

端

菊

山

葉

庭

端

菊

桂楫

端

葉

山



回々多うう物尺そえたる  
おろろくあふれのおもあつり  
多うたう君と海うひより  
白うみの海う船おとせと  
おほん帰ふおとを占ふ  
籠籠のあれ寺の月遠く  
猪子の粟此何とまひく  
控へてまきと深林の秋の虫  
そあうううううの尾の聲  
とふふのう物焼く何のゆ  
入りの法乃早二二  
まき、油きけつと花のれく

菖 柴 菴 山 菖 菴 山 柴 菖 菴

つしあふううううう西行

楫

同

牡丹花を深くさひや、竹のあけ  
新有洋し、春の玉碎  
要袋をみまふおとけ  
はくし（船をけりて笑ふ）  
新家根をまきぬ板の雨雲  
二百らひのうううう  
たふと引法、少あつる男同士  
海を渡りて地の人うけ  
竹障のすううううのう

菖 桐葉 叩端 菖 菴 菴 菴 菴 菴 菴

海の岸をゆく舟の漁  
手ふくくまきあまの舟の原  
からんのうらたきふわ光  
くすくすきあまの舟の層  
硯のくくくれあぬの筆  
ろくくくくく海の磯ん  
省古風をうつく舟のま  
花あまのくくくくく角  
葦の尻もくくくくく  
出代の舟をくくくくく  
舟のくくくくくくく  
地雷火くくくくく浪の赤

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁

海の岸をゆく舟の漁  
手ふくくまきあまの舟の原  
からんのうらたきふわ光  
くすくすきあまの舟の層  
硯のくくくれあぬの筆  
ろくくくくく海の磯ん  
省古風をうつく舟のま  
花あまのくくくくく角  
葦の尻もくくくくく  
出代の舟をくくくくく  
舟のくくくくくくく  
地雷火くくくくく浪の赤

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁

湯さやの杖は度ふ本字  
花垣千重の喜ぶ紫引鏡の  
これと角紐まは堀牛

箱 紫 湯

同

柳の心と木さや四月の板竹  
さよめ杖つく岨のまゝ  
牛の子北乳をのむと新果うそ  
かけろふとくろ竹の海欄  
傍つと栗の穂くつゆさう  
ひくくけくくくめり松  
霧さやと深の天宮と海魚く

箱 紫 湯  
柳 木 板竹  
岨 新果  
竹 海欄  
栗 穂  
松  
天宮 海魚

狂糸の信千がを只のす  
鼻残千流をほむ女河の  
ふさけの市上への絶く流  
等くつ散半のま戸に安ん  
とをさる 存れきくくあうく

箱 紫 湯  
信千 女河  
市上 絶  
散半 安ん  
存れき

同年六月二日東武於小石川具行

清さの瀬くくくくくく  
青蓮の字を尺くくくく月  
松風のたうく紫崎あけくく  
酒店の秋を原子のゆき  
社々まふくくくく旗くく

清風  
箱 紫 湯  
青蓮 尺  
紫崎 月  
酒 原子  
旗

昔探偵く香子志く  
 三の記を奪い其の中一歳を先  
 鍾を花多れいやういの鐘  
 光りて子付は心を奪うとて  
 如きりしとらちをうさう  
 戸隠のふら小家の静けり  
 阿答梨もくあけり父の三年  
 家新くくられた自惚の一忘屋  
 舟子一旅しいのちゆきあふ  
 雨さち川故き火いり終り  
 早流りれるも文を十尋  
 既すは其す人をもめさむ

空箱風堂為丸角空箱風  
 素堂

吟石高く白眼ともやうに  
 咲稲新千こらりく月よるよ  
 浄瑠璃みんたのうらむ秋  
 枝の葉は價葉の半せけり  
 くらんん尺をくう美婦如き  
 花あす玉々の涙は後うけり  
 水糸をき丸山のまき  
 三尺の鯉子か能く料理の言  
 とや魚好もそめくむ出と  
 幾回の戦い片や堂やうに  
 逝水やとを控ぬものいハ  
 白きのとらけ帰るの十五日

角丸高堂風箱空丸高堂風

史碑一碑の更なり一變一と  
臨のすくみうのしるきや  
を一息やのほを二羽一と  
我造る如猫の爪を指きん  
きぬくの衣をゆるぎ  
明のあはれつくりの人のた  
古梵のせうに花四をむ  
ひろくし女を臨すうの  
引板を業くしをのこ  
武古のものすさまじ  
七里は毎の七里秋風  
廻之の雷南はむと化

九高角壺翁風壺翁

槐の小きさく解くす  
臨陽の端をそすの飯屋建  
狂女さりとふは志とふ  
情一うめは黄金の朽了  
将く味ふ出羽の餅  
室月のこもるうらま  
枯るあしりのつり  
智手は屋を起師を  
三里とすえり不二  
庵をこゆり決るを  
まを然る小の海  
臨片とすり様依く狭うき

翁風壺翁九高角壺翁

紙水きよむる五郎入是  
悔もこゝ上戸も儀くかくこ  
きしちをしくし風を流し敷  
伊藤すまれ湯柳の敷はきし  
入院尺高の長う砂と流  
一陽を露正月とやう未  
海嶺よふくし吹くや  
流るるのあしし知れをあむ  
志の子れみしれ瘡もし  
くやきこくた門竹をさし  
名もあし取もこくし  
店の月高き入射あつた

寺高丸角重扇風堂高丸角堂

三  
ろけききひきまきよの横米  
みのまね狂つておれし  
志をり死さる場をいむ  
和をれ石凸四  
小女郎小まんら大根曳丁  
血もさく起情もさけ  
尺よもの母の門ハ西むき  
御所のの夜をさくまの  
汗流ううう横了  
さくさくは旅字案を  
ふりこくさく小根の  
散花もさくく月高き

丸角堂扇風堂高丸角堂

胸くさくさつらん何のしん軒  
髪しつげん舟のきしん  
立袖の如く髪をいらくら  
きれにこり乳大の襦名ハカ  
麻布の病氣ははやくきけ  
わらう紫やいさりのきけ  
久治二季のちり石も  
みされ髪候らくらも休む  
除年かよふらくらも  
三日月の氣西にたふさ  
秋ハハのくはけけの棟  
枕心もねハハのきけ神屋

富 堂 風 翁 丸 角 富 堂 翁 富 堂 翁

只一眼も花ハ一ナ  
特のくさくさくさくさく  
定家うらうら杖おき  
佐く咲もをハハハハハハ  
梅の輪入の位ハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハ  
能を修ぬ不勸号き  
あうまうさハハハハハハ  
わうまうさハハハハハハ  
最勝ハハハハハハハハハハ  
さくさくハハハハハハハハ

角 丸 富 堂 翁 富 堂 翁 富 堂 翁 富 堂 翁

梅さくら〜きのつやをぬきまされし  
秋風すゝむする生ニッるふとく  
翁  
秋風

香さくら〜幸息さく枇杷の皮を  
笑々〜とく山をのむ  
翁  
湖春

檀の木はあかかたぬきあま  
家すらすとほろよこ  
翁  
秋風

梅絶くりふ〜梅今何々  
葉のまはれ處葉すつとく  
翁  
湖春

かろさねの杉をち〜纏う  
山ハさくら〜を紋うま  
翁  
子那

世は翁り御の代  
さるよまはれま〜とま  
翁  
知良



貞草と西寅

神位紙

日のまらむとまふすのうら 朝のゆゆみい  
えおのりゆとまふすのうら 暮る長事出  
古あけけきと朝のゆゆみにうけしと  
つらね竹の寝さくあつらつら流るる  
みよの葉葉あはれ

其角

みきうりにさく入古寺の桐の家

文麿

貞体お人の服体四はつとまふれはれ  
とも富時古くふくく京守とまふ  
くくくくくくくくくくくくくくくく

本筋のまらけし枯る家の桐とけし  
けしきてと葉とまふくくく桐の家とけし  
桐の本とけしと桐とまふくくくえおと桐  
あふふと本かりのまふくくくくくく  
うけけしと桐とまふくくくくくく  
けしとけしと桐とまふくくくくくく  
けしとけしと桐とまふくくくくくく

雨の村り板尺くくくゆく棹さく

松風

中子の体長きく風流るるをけしけし  
昔のの葉とけしかきくめめ板尺とけし  
あはれとけしとけしとけしとけしとけし  
昔と板尺とけしとけしとけしとけしとけし

とらつら舟の棹さして暫く狂者の体現  
言と桐のま太師や赤狩り侍の附船  
大切し

酒の 幌り入連の 月 二 齋

四白月あられ移しそその松竹海苔が  
よのよの折侍の幌ハ燈籠をくそん  
あしむのまききゆへし

秋のいよふれはるのゆき 文 人 牛 重

秋のまききえく市お新やうま体きま  
一海をうたふらうら秋をのけや  
も舟のまききいふらうら秋をのけ  
こもりのまききいふらうら秋をのけ

秋のいよふれはるのゆき 文 人  
又一人をを敷ききし

秋風

あふ山あふの体は尺ふし付侍の體は  
まききかき山崎の炭電を振るまき  
体あふまききいふらうら秋をのけ  
強き人のまききいふらうら秋をのけ  
里のまききいふらうら秋をのけ

仙化

附船ふまきき 炭電の白を神矢のま  
あふ月あふの体は尺ふし付侍の體は  
まききかき山崎の炭電を振るまき

李下

象のうろたふり 面おほひきよ

見お赤んぼをいし何と付くともみく何と  
強めしつゝもかし里しのまゝといひる  
よし松飾もむかひかしむかひくたを  
うらゝきよう雨を伴い侍る常春  
毎日早寝する掛

春白

おまゝにさしこもむとあむそあれハ  
くれさしつゝもななくそ何若の何は保  
く思ひつゝもさしつゝも松飾も笠ね  
あつせきつゝもあつせきつゝも心は切は侍る  
念佛 一ノ 狂子 侍りつゝも  
けさつゝも無きつゝもつゝもつゝもつゝも  
社之佛者をつゝもつゝものこま侍る侍も侍

朱弦

おまゝに狂信くともあつ所中つゝも社之れハ  
そつゝも里の侍るつゝもつゝも

蚊足

侍まゝつゝもつゝもつゝもつゝもつゝも  
連糸の無きつゝもつゝもつゝもつゝも  
度し家人のつゝもつゝもつゝもつゝも  
つゝもつゝも

五里

かゝるおよもつゝもつゝもつゝもつゝも  
つゝもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝも  
軍情もつゝもつゝもつゝもつゝも

三烟

つゝもつゝもつゝもつゝもつゝもつゝも  
附おあふあつおあ白耳のつゝもつゝも  
一白文つゝもつゝもつゝもつゝもつゝも

もしあしひけやう様くしよ一白  
の姿そを眼をけし尺くし

枕筆

くききけあをも富の尺あてめ  
あ白を標中くしけし句くき原  
しをきくしきくし世とけし  
えくを能く観也

文録

みくされしたの本様のお度子  
富の尺酒もくしえのあれに甘きお  
よく色の白を能く本様のものよ。  
あくきやくあゆのれひきくし  
よく情けしと云ふ言をきくし  
のりねむき情り

母角

後任女 きぬし

後任女はほろひの妻とてんあしめく  
まれしとくしふ原の物と和さきら  
あひもきぬし碓あしにかきぬし  
子方の物やひつやうのわしけり  
ゆきやくあゆのれひきくし

コ齋

山治乃乳をのむ様のおし  
碓ハ里水き演海おしけりくよみけり  
お嬢け更科よりけりく山敷くも後任  
碓を山敷くしゆしひくし乳を看  
様しとくし女しと字をゆしひくし  
かすのきし言はまのまよくし

山のしらしを甲斐又の代とも見よ  
松山

松の木の葉にまよふ川のさけく冷  
しき御を形言しつる竹松を必致と  
仰しつゝいふこと

松山

はのふ系別髪を埋みみまん  
袋の危く物すまきまを又くみ  
髪を敷しつゝ甲斐くまハ古人佛老  
の古法未だあはれ自然とあまら  
奉りつゝ利敷を語つて他は新く  
言ふこと欠けり

茅寺

とつては記をもすつ竹の戸  
あえりまはたは果作らまはる

流きり

李のい

吸りとりて身をゆるせのり  
おのほろの御をこころとてちね  
編を結しつゝかろれ人の心は  
若ん身を日にかきつる御は只白海  
白化の初つてはまき眼を過し

仙化

橋ハ小舟をもつゆり 陽片  
まの草葉も春のつらや強くあ  
らつてつらふを又くし松葉の細目  
あつてハ安しつゝつらつてつらもの

朱弦

あつてつらつてつらもの  
見又まのけつらつてつらもの

世を回つてきつてはなれぬ夢  
子れまゝの姿ありてはなれぬ夢  
あつたかたはたしきまゝに  
をのうらやうの体はなれぬ夢  
まのうらやうの酔ひはなれぬ夢  
白のうらやうの酔ひはなれぬ夢  
あつたかたはたしきまゝに  
をのうらやうの体はなれぬ夢  
まのうらやうの酔ひはなれぬ夢  
白のうらやうの酔ひはなれぬ夢

岸白

子里

世を回つてきつてはなれぬ夢  
子れまゝの姿ありてはなれぬ夢  
あつたかたはたしきまゝに  
をのうらやうの体はなれぬ夢  
まのうらやうの酔ひはなれぬ夢  
白のうらやうの酔ひはなれぬ夢  
あつたかたはたしきまゝに  
をのうらやうの体はなれぬ夢  
まのうらやうの酔ひはなれぬ夢  
白のうらやうの酔ひはなれぬ夢

松風

扇

中れにまき取がてし句をかきし竹こ見  
おのりし植あまむのあしひふりく  
かみゆり

紫衣の 風よまききり入  
コ腐

まき切てさして紫衣新しおの民あま  
し武士の老若とも子に改しき物な  
なと足付し作り大形ハ物清なるの体  
を急りしつりし成ハ中持する人の聲  
はく小蛇千入厚舟も足付したるの  
はめしあしきれともさなるまき  
千ハあしき物清のこまき竹こまき  
とやしきり

かきしきりしつりし成ハ中持する人の聲  
はく小蛇千入厚舟も足付したるの  
はめしあしきれともさなるまき  
千ハあしき物清のこまき竹こまき  
とやしきり

かきしきりしつりし成ハ中持する人の聲  
はく小蛇千入厚舟も足付したるの  
はめしあしきれともさなるまき  
千ハあしき物清のこまき竹こまき  
とやしきり

かきしきりしつりし成ハ中持する人の聲  
はく小蛇千入厚舟も足付したるの  
はめしあしきれともさなるまき  
千ハあしき物清のこまき竹こまき  
とやしきり

かきしきりしつりし成ハ中持する人の聲  
はく小蛇千入厚舟も足付したるの  
はめしあしきれともさなるまき  
千ハあしき物清のこまき竹こまき  
とやしきり

かきしきりしつりし成ハ中持する人の聲  
はく小蛇千入厚舟も足付したるの  
はめしあしきれともさなるまき  
千ハあしき物清のこまき竹こまき  
とやしきり

岩の戸 榎 軸 するの 竹 ちり ちり ちり ちり  
まき ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり  
まき ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

奥の山をさぐる者ハも亦の山ヤリ礎石  
次方の南十市の里芳野の里玉川なる  
附く後赤子伝く付る地は是れ此の  
源系を不ニ有る史料ハ付るを當  
時ハこの形をよとするを其をよといふ事  
をいふ事なり

李正

これ三代の刀一丁張治  
はる波中の毒物し毒るハ人しく山  
付くく信正の昔ふとサ物と伝く事あり  
石の戸極なりと云う張治を其をく  
よきこと伝きし傳き伝は水なりと云う  
ハ名剣を歩く事ハ其ハいふ事なり

かふは之代と云ふは於粉骨の張治の  
名人と云ふ事なり

仙化

永緑ハ壺と云うく松の風  
永緑ハその代をいふハ其ハ張治の名人  
かへハ其ハ其の依る事なり  
いふことあるものもいふ事なり  
よく心をけし歌味なり

朱信

近江の田植美徳なり和らむ  
古代の傳し金と云う事なり昔と云ふこと  
昔ハ物々官殿なりと云ふ事なり  
人しく傳し付る事徳近江ハらむ事  
よし田植なるの風は其をよといふ事



疾起こゆのちらふきんほきき  
芳重

時をよそと命をいふしみ徳をけし  
一石をさし時をさゆふひなりたる心  
おかしきわらふきんくち起てしとけき

舟より海にゆき海にゆき  
共角

おのれ水邊に海にたふさるゆふ海に舟  
くくさのゆきとくく風をきつとさひ  
うけぬおかしき海にゆきとさひ  
きされにさひしぬ物をさるゆふの  
よきとくく又海にのさ士し

舟に海にゆき人の娘をとりつれ  
李い

中に風を人の娘をとりつれ  
さきとくく他をさし新し其味をくく  
松浦のゆき女をくく心成に心を舟の  
夫なるとは海にゆきとくく舟のつり  
空人のよきとくく舟にゆきとくく  
松浦のゆきとくく舟にゆきとくく  
此のゆきとくく舟にゆきとくく  
うくしゆきとくく舟にゆきとくく  
くく時をさしとくく舟にゆきとくく  
不き

松風

待しゆひの時ハ墮きとくく舟の中  
と角

松浦のゆきとくく舟にゆきとくく

之や一と多消解身もやわら物休  
しき休を心守りけり程の地も育てむ  
ろくの中と認め就改るのうらむら体  
るる心代さるる又文字もくしこの味を甘  
さうに釋と及んぬ味のみめし

友よふ 蟾 け物しきの 夢

心化

友よ蟾をけ改りしけり程の地も育てむ  
物清きころもあふりて改りしけり程の地も育てむ  
よくうけらるるまきあうとさうしやう便  
みよまををぬしひさう

あさくそりや けりて 歌 景

コ赤用

市の付るるの取しはれしものも歌景  
改りしきも私りて改りしけり程の地も育てむ  
よみ付る趣しけりて改りしけり程の地も育てむ  
の御所へ有るるも志ひし名もす  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

門の 意 千 夜 陳 の 寺

岸白

都の休ありしは後まがしめし門ありて  
網のちあふりしは体まがしめし墨中し千  
と附るるすしは体まがしめし墨中し千  
預るるるる物らふしは体まがしめし墨中し千  
はるるるるるるるるるるるるるるるるる  
屋寺中し押さく狼藉ししは体まがしめし墨中し千

芳重

さかきとにけりまゝ一昔の中北相とや  
うへ安ふの心とえ有るゝと心合ふ  
るもさくゝ

廿角

何れやのぬれ海とさくひ  
おひの襟をよくさくゝとけさるゝ  
ゆるぬすの体むけりゝゝの  
さめれおのちゝゝの影ゝと能  
能服

文鏡

船の一ちりたひをもたなりし  
たしし附船まひく後さるゝ能  
さるゝ一けりおのふ功若の心けり  
さるゝけりさひ一お若の二とと長  
よるゝゝゝ西のの岸のたゝ入りの影を  
とるゝゝゝよめ。月夜をぬとてゝ一  
仕立ゝゝ長編をちさるゝ用ゝゝ  
けれゝも御能ハさるゝのけりゝ  
からしむけりゝゝもさるゝを  
さるゝの能けり用ゝゝ先  
れゝの能けりゝゝ

摩下

れゝの能けりゝゝ  
けりゝの能けりゝゝ  
とるゝゝゝ

摩白

れゝの能けりゝゝ  
けりゝの能けりゝゝ  
とるゝゝゝ

おもひにけし海に秋の夜ももつし  
ほろもあふ聖神のうらみ夜をくぬ  
楓風

はるのけしけし又もあふて物遠く遠の  
夜の新葉あひのしとす時を聖神の  
けしけしをけしけしとけしけしとす  
おもひにけしけしけしけし

人あまのこをけし物もけしけしけし  
けし又秀逸しけしけしけしけしけし  
大晦日の夜もあひけしけしけしけし  
けしけしけしけしけしけしけしけし  
けしけしけしけしけしけしけしけし  
おもひにけしけしけしけし

揚水

酒もけしけしけしけしけしけし  
洞  
朱弦

金山の系舟の大空しあふとけしけし  
けしけしけしけしけしけしけし

右も美しけしけしけしけしけしけし  
けしけしけしけしけしけしけし

けしけしけしけしけしけしけしけし  
けしけしけしけしけしけしけし

けしけしけしけしけしけしけしけし  
けしけしけしけしけしけしけし

けしけしけしけしけしけしけしけし  
けしけしけしけしけしけしけし

けしけしけしけしけしけしけしけし  
けしけしけしけしけしけしけし

芳重  
心化

竹うらむをハ在かこよは  
南むく葛屋の柳のちあきし  
親と樓を少屋のつれし  
餅化るあらの度あまを少令を  
糶う買うし秋のくらくと  
唐のうももあまぬ人もあつたぬ  
あきき男のつひふすむ月  
薩の西枝七甲をぬくすむ  
伊勢河内山あま川つ  
あま車米つくるる河つ  
梅ハさうりは院くも閉  
二月の蓮葉人もすさあま

楊水  
不ト  
之鶴  
松風  
子嗣  
朱法  
不ト  
李下  
楊水  
甘角  
色香  
コ之

姉さのまは屋ふりの氣  
胸のくぬ越の端を蹴るの  
あまのあつとるる昔の菊さ  
美のあまをさつとみあつたに  
木魚あゆつ山うけり  
因をやうし休あつた月夜  
秋さあつとるる長うつれあひ  
可しあつたあつとるるあつた  
くらくあつとるるあつたあつた  
と度あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあ  
契情をさつたあつたあつたあ

芳重  
菊  
松風  
之鶴  
李下  
コ之  
不ト  
子嗣  
朱法  
仙化  
李下  
文解

酒よみ習ふあやのくくく  
水波ふ笈折り子習うくく  
梅まきさ昔ふあやのくく  
村角より石のくもく火吹けぬ  
地くく水の沖とくくうく  
伊ちりものる内子釣りのくく  
楫よりきくく楫つくく秋  
佐長のゆきされくせやゆく  
尾すくゆくく尾まの火  
江子牡丹十里れきをか  
あささむきくくゆきゆき  
岩根端ゆきく地をきくく

芳重  
岸白  
コ吉  
咲水  
仙化  
不卜  
李下  
楊水  
文鏡  
子吉  
咲水  
史角

あくや三井のくくははくく  
道ぬきくくあや奴子返家く  
管信をくくくすも月ハはく  
足成の尾山くくく海くく  
子あり唱る観音のゆき  
舟ゆくつゆみあやのくく川橋  
をふくくくくく松の志くく  
宿むくくく七折りあやのく  
まのくくくくくまのくく

コ吉  
仙化  
芳重  
楊水  
史角  
担風  
咲水  
不卜  
岸白

南直一尺喜くく題子

久のくくくくくく幼中在

古本

旅あゝ友もささきしこす  
かたハコウ極の葦掃屋  
よしこひまる一瓢の酒  
月これく燈火あふ海の上  
味の原より吹雪きのおと  
牛境子給持もく羽折る酒  
右位阿とくく美女もささき  
提灯子大燭燭のささき  
おあさささす字の材木  
きさささハ舞ふささき  
清いおさささ後守也さ  
仇人のあさささ氏を於

扇 其角 鼠雪 扇 末 角 末 角 末 角 末 扇

けりし付さる 扇 舞の  
峰 返了八守山もく火の  
軍の加減うとき長おひ  
七はしに心うさささぬ月も  
平生うけし海東の帳合  
高僧のあささささささ  
小姓ははやく葦礼の中  
丁度もさささささささ  
あさささささささささ  
表まもさささささささ  
はらささささささささ  
雲かささささささおほえ

末 角 末 扇 末 扇 末 角 末 角 末 扇

毛體も——きと画のとくやう  
くらの底のふり十景 家  
りそ何時そ 醉さたの 月  
きうくはひいし 浮舟のあけふ  
萱にくすしき 舟の程 既也  
つらとても ぬれの 片 燃り  
四の ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ  
鼻つとて ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ  
ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ  
ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

重 角 扇 末 角 重 末 扇 空 角 扇

三月廿日

花吹雪七口 都見く ぬれく 可れ  
慣る 姓は わく 細 梅  
足 徳本を 妻すく ぬれ 代——  
末 一 糸を たる 扇 の 戸  
名 有る 味ハ ぬれ ぬれ 扇  
枝 欠く ぬれ ぬれ 扇 の 葉を 扇  
善 名 子 ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ  
肉 お ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ  
既 子 ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ  
一 糸の 葉を ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ  
松の 子 ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

清風 扇 白 角 扇 末 角 重 末 扇 空 角 扇



生々 控ふ 女ありしもの  
影かこらし ぬ敵を 幸多け  
と 餅を ねふ山 寺  
雪を 竹橙や さくらに ありし  
虹の 付しめ 八りの 白の あり  
濃み へ 澄泉を さす ありし  
三つ へ 麻女 ありし 夫を 戻  
いきし 一年の 幸ありし 物ありし  
男ありし 此の 白粉を ぬれ  
膝 ありし 明の 風 終を 忘れ  
ふし ありし 牡丹 夢 了  
耳 ありし 妹、告 ありし 鄭 云

風 良 富 白 角 富 龍 風 角 白 角

此の 幸ありし 夢を ありし  
れ 焼て 刀を ありし 供 ありし  
系 ありし 鹿を ありし 女 ありし  
楯 ありし 桑 ありし 夢 ありし  
夢の ありし ありし ありし  
物 ありし ありし ありし  
眉 ありし ありし ありし  
眉 ありし ありし ありし  
何 ありし ありし ありし  
ありし ありし ありし ありし

風 角 富 白 角 富 龍 風 角 白 角

車一と下く喜の体く心

白

和漢

破風<sup>ハ</sup>只<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>新<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>弱<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>又

扇

慈<sup>ハ</sup>蚤<sup>ハ</sup>避<sup>ハ</sup>相

喜

合<sup>ハ</sup>歡<sup>ハ</sup>醒<sup>ハ</sup>馬<sup>ハ</sup>上

扇

か<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>少<sup>ハ</sup>回<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>最<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>と

扇

月<sup>ハ</sup>代<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>全<sup>ハ</sup>氣

扇

露<sup>ハ</sup>路<sup>ハ</sup>繁<sup>ハ</sup>添<sup>ハ</sup>玉<sup>ハ</sup>迹

扇

弦<sup>ハ</sup>地<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>古<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>張<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>中

扇

情<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>左<sup>ハ</sup>右<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>知<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>切<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>休

扇

聖<sup>ハ</sup>第<sup>ハ</sup>疆<sup>ハ</sup>偷<sup>ハ</sup>鼠

扇

古<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>所<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>お<sup>ハ</sup>魂<sup>ハ</sup>屋

扇

是<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>首<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>足<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>板<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>撥

扇

乳<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>縁<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>何<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>思<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>足<sup>ハ</sup>る

扇

舟<sup>ハ</sup>鐘<sup>ハ</sup>風<sup>ハ</sup>早<sup>ハ</sup>浦

扇

鐘<sup>ハ</sup>純<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup>高<sup>ハ</sup>川

扇

魚<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>泥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>は

扇

食<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>す<sup>ハ</sup>け<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>火<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>け

扇

託<sup>ハ</sup>教<sup>ハ</sup>三<sup>ハ</sup>社<sup>ハ</sup>本

扇

韻<sup>ハ</sup>使<sup>ハ</sup>五<sup>ハ</sup>車<sup>ハ</sup>填

扇

花<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>丈<sup>ハ</sup>山<sup>ハ</sup>開

扇

海<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>杖<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>志<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>す

扇

剪<sup>ハ</sup>銀<sup>ハ</sup>鋸<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>寸

扇

善師の海や玉を山懸く人 篇

朝の月影の孤をうやうし 篇

風 飡 喉 早 乾 篇

すくねつる黍の葉はゆく秋立て 篇

内を燈とんすう庵の夕月 篇

霧 離 顔 孰 兵 篇

寰 浦 月 潜 音 篇

ぬらんまそそをねを似るるの巻 篇

くまはねぬ松の珠散と船さし 篇

山 伏 山 平 地 篇

門 番 門 小 天 篇

鷓 鷯 窺 水 鉢 篇

ちのりくもりく了のりくをなけ 篇

たふはふ和瀬の音を花をえく 篇

臨 谷 伴 蛙 仙 篇

城 崎 の 壱 を うゝる 為 り 篇

海 苔 うゝる 芦 の 穂 の 上 篇

春 の お け 鐘 を 隔 ら ね び り 篇

宵 子 へ さ さ ぎ 石 系 の つ 由 篇

入 月 子 存 帳 の 武 者 け り 篇

葉 の 笑 子 竹 葉 を 何 中 と ら 篇

山 子 の 登 子 狐 の さ ら へ の 庵 篇

花 沾 篇

花 沾 篇

花とらふやと酒造るし  
みよきまにきかぬか  
志ろきめひの地をみん  
縮張を輝の極をみん  
みよきまにきかぬか  
酒造るしと酒造るし  
何と焚火と酒造るし  
構の月ひらけの酒造るし  
酒造るしと酒造るし  
木念の木の酒造るし  
四十雀と酒造るし

酒 沽 翁 翁 沽 翁 翁 沽 翁

四十二

年とや赤井の乳ハ星月歌  
年 紅梅をたけむる 残  
妻をを茶をのみおほく  
山とて足くわみく好の所  
ひく只をとおそく  
坂をさす秋をみん  
有のすくわみく好の所  
帆を八合り 輝 郎の舟

其 翁 今我 若翁 若翁 若翁 若翁 若翁 若翁 若翁

古也や雄飛くわみく好の所

翁

四十二

其角のこころの静けさうらるる 協の葉 其角

静きぬきやゆきぬ菊の友 素堂

蕙の菊ふく秋のまの園 菊 沾園

貞享四丁卯

松のこころをこころに 其角のこころ

きんこころやす

時を秋よりゆく松のつと 菊 沾

松のこころをこころに 其角のこころ 菊

山うけの菊の初のみみこころ 沾蓮

武若神のつと 早川の菊 其角

松のこころをこころに 其角のこころ 沾菊

かゝるの松をこころに 其角のこころ 菊

あふの松をこころに 其角のこころ 沾菊

あふの松をこころに 其角のこころ 沾菊

あふの松をこころに 其角のこころ 沾菊

あふの松をこころに 其角のこころ 沾菊

あふの松をこころに 其角のこころ 沾菊

あふの松をこころに 其角のこころ 沾菊

あふの松をこころに 其角のこころ 沾菊

あふの松をこころに 其角のこころ 沾菊

月清く白雨 汐ふみすれ 楳  
言をつらふく 鯉てくく けつ  
花咲て人し しまぬる子 の尻  
歌板 珍ふ山 吹のほけ  
作法 海やたらの 咬のまきえて  
聲 せうくく せうくく せうくく  
橋の築て 糸又 舞を せ 踊り  
舟より 細く せう 舞のまきえて  
物うけ 八思ひ やせふ 上 月く せう  
琴を せう せう せう せう せう  
下をい せう せう せう せう せう  
丸 輪 せう せう 尾上 せう せう

四十四

風の音 せう せう せう せう せう  
大口 せう せう せう せう せう  
く せう せう せう せう せう  
ひく せう せう せう せう せう  
一物 せう せう せう せう せう  
せう せう せう せう せう  
頭 せう せう せう せう せう  
脚 せう せう せう せう せう  
襪 せう せう せう せう せう  
袴 せう せう せう せう せう

同

四十四

はたさうしやかきんかみかみ

濁子

月

篇

貝ひらひらしゆく

篇

醉

其角

松

篇

池

角

み

壺

奇

子

妹

篇

記

壺

第

子

は

篇

二

壺

一

子

苗

壺

仙

子

仙

子

同

濁子

手

其角

火

篇

火

仙化

清くこく松竹もさるる小袂の月  
かきしにみんすまき一あし  
たか持る雪の如たし春の白  
春の翠の庵にほく心は  
かきしと友に竹花芽朽く  
うたしと心すいらに指を  
指すに松竹もさるる脚  
ゆき合の心すいらにさるる松  
かき川のあしを軸のまをいん  
萩花もさるる常のまのわの  
菊の心すいらに松竹もさるる  
子も終るす月を深きぬ

松風 二齋 子 記 角 化 風 角 子 角 角 子 文 子

花の心をこく八の長とさるるつ  
松竹もさるる一玉の 酔  
菊の心すいらに松竹もさるる  
河の心すいらに松竹もさるる  
松竹もさるる松竹もさるる  
心ハ媚すいらに松竹もさるる  
四の心すいらに松竹もさるる  
さるる心すいらに松竹もさるる  
片里に松竹もさるる松竹もさるる  
竹の心すいらに松竹もさるる  
美濃の心すいらに松竹もさるる  
あしれに松竹もさるる松竹もさるる

李の 風 菊 角 下 高 高 子 子 子 子 子 子 子 子



月入字電 秋の風すこく  
下しの芳を 荷ふ 燒 米  
塚のふ母 室のふ秋の夜  
邦一を軍 子とてゆくそ  
花のたぐき 一つを 種つた  
すく 紺をゆくす 目白を

子 角 高 化 下

十月十一日 熊子會

友人と 赤良 夢とふ 初対面  
まこと 山 夢 夢を 宿くす  
熊 鈴の 心 浮く 夢 花 だの  
糧を 分ける 山 けの 朝

白之 其角 松風

かけ 夢とて 夢生の 夢は 夢み  
新し 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
中 秋 画 工 一 夢 得 了 じ  
鶴 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
津 垣 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢  
夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢

文鏡 仙化 魚見 欽水 金華 扇雪 執筆 扇 之 角 風 鶴

葛の葉おむひも初あけし  
たをぬるもくもくも偶侶  
途巾よまゝの庵をまき  
沖こくおきぬれしハ陰  
るるの片のつゞけをぬき  
あつゝるをゆきぬきの手  
<sup>二</sup>明のあきはし海客のあき入  
萱のぬけぬのまを焚き  
光のぬけぬふけにぬきけ  
君まゝぬきしぬきのあき  
ぬきぬき干漕のぬきぬき  
いのらぬきぬきぬきぬき

化 峰 之 水 吹 角 篇 之 化 水 吹 空 之 篇 峰 化

起出くまもつてそん海の  
まぬぬおきぬきぬきぬき  
ぬきぬきぬきぬきぬき  
小ぬきぬきぬきぬきぬき  
子のぬきぬきぬきぬきぬき  
ぬきぬきぬきぬきぬき  
<sup>三</sup>懺ぬきぬきぬきぬきぬき  
海客のぬきぬきぬきぬき  
ぬきぬきぬきぬきぬき  
ぬきぬきぬきぬきぬき  
ぬきぬきぬきぬきぬき  
ぬきぬきぬきぬきぬき  
ぬきぬきぬきぬきぬき  
ぬきぬきぬきぬきぬき

空 角 風 峰 化 吹 篇 水 峰 水 空 之 篇 峰 化

路家や家居虫の友千交りん  
茂りわろ海苔すくふ丁  
舎津ふらうらむれ本芽のみ  
ありきしれらる喜の山

如行

水篇  
火  
之

香名あしんて松人の名をみ  
旅人と家尺をゆきおまの重  
きつつきさしし風ひさし  
まの山跡の本城をすけえ  
あふりあふりての跡原  
小法師千駒ひふむらび  
梓の古枝をほりあそく

桐葉篇

紫篇  
竹

香名あしんて松人の名をみ  
旅人と家尺をゆきおまの重  
きつつきさしし風ひさし  
まの山跡の本城をすけえ  
あふりあふりての跡原  
小法師千駒ひふむらび  
梓の古枝をほりあそく

竹篇  
紫篇  
竹  
紫篇  
竹  
紫篇  
竹

芭蕉翁不杖了して止ぬ

芭蕉翁の芭蕉翁不杖了して止ぬ

芭蕉翁の芭蕉翁不杖了して止ぬ

芭蕉翁の芭蕉翁不杖了して止ぬ

芭蕉翁の芭蕉翁不杖了して止ぬ

芭蕉翁の芭蕉翁不杖了して止ぬ

芭蕉翁の芭蕉翁不杖了して止ぬ

芭蕉翁の芭蕉翁不杖了して止ぬ

芭蕉翁の芭蕉翁不杖了して止ぬ

芭蕉翁の芭蕉翁不杖了して止ぬ

芭蕉翁の芭蕉翁不杖了して止ぬ

芭蕉翁の芭蕉翁不杖了して止ぬ

降いく雲かしの東の

舟に命の飯をうけ

酒をたぐひしはく

浮舟し旅の塵を

僕におくはる牛

あつた三反哺の

鳴る舟に命の飯

酒をたぐひしは

浮舟し旅の塵を

僕におくはる牛

あつた三反哺の

鳴る舟に命の飯

翁

業言

知足

如風

安信

自嘆

重辰

吟信

吟

翁

足

定

翁

風

信

足

辰

信

足

翁

吟

翹とあふふ情一はうい  
新ふる露を朝をよけきさ  
三度わしる朝のたぐりけ  
山寺のちり削る木を露の  
煙あつしる暮ららうく  
流津激うおこふはの勢あじ  
狐可くくすきけ学む  
展破る月ハむの朝あつ  
光の如娘のころもあさ  
ふさふさし榻の柱の志け  
陣の仮座り墓をたぐり  
山さしに横をくさるる雨の陣

情 風 足 翁 嘆 空 翁 展 位 風

音をばらけし多ん時を  
花菱文を集るる巻とら  
ゆ枝うくく作垣の梅

是 空 執 筆

三

にたつけりもあつた  
凍あつた千拾うれぬ  
松風を吹く白向のま  
朝白き鳥おしる  
鳥居く舟押居るの秋  
きぬし山の端を月  
きぬしや鳥居を月

越人 聽處 野水 翁 翁 翁 翁

眉をうすくもつるも物さうなれ女  
家のおもひつゝもあけのあそびみ  
手飯のふかたは清きよきよき  
是て来りし布子苦きよき屋の  
涙しつゝも能くおぼしめし  
門治の前尺了人のあそび  
笑子しあもる唯一の橋あ  
能くはに南をうく橋の橋あ  
夜のあそびしつゝ月  
しつゝと律儀なせの橋あつ  
唯しつゝしつゝつゝつゝ  
尼寺のまもるつゝつゝつゝ

舟泉 瓶筆 水子 翁 人 泉 洞 泉 洞 泉

物瓶あけしつゝあけしつゝ  
夕のぼのぼりつゝつゝつゝ  
布杭ニおもしろきつゝ  
皆らつゝ妹をあつゝつゝ  
食しつゝつゝつゝつゝ  
船之のつゝつゝつゝつゝ  
々々雙割つゝつゝつゝ  
柳のまろつゝつゝつゝ  
ほろつゝつゝつゝつゝ  
月去のつゝつゝつゝつゝ  
物まろつゝつゝつゝつゝ  
は橋をめぐつゝつゝつゝ

泉 瓶 水 洞 人 泉 洞 泉 洞 泉

五  
三

山ひよわむしつりつり神の  
去りけりる殿はつらうた  
智るらひつり除らひつり  
何事もあつりつり花の  
藁の中へも枝山ひよ

変水人洞変

早崎の園をたふしや  
船酒つり海士の埋火  
築山のふりれも梅を植りけり  
あつり猫のまをりつり  
つりそのあつりねをたふし

業言 知豆 自嘆 安住 菊

一里のそと母をりつり川上り  
神をりめしつりつりつり  
市をりつりつりつりつり  
牛めりれつりつりつり  
霜のりつりつりつり  
舟をりつりつりつり  
つりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつり

如風 重辰 足 足 足 足 足 足 足 足

山ささきとみとましのほけし  
 多標元お油さうしうさうお  
 角すし角すし化粧ひすしお  
 才川才の文とこひささく帳の内  
 新しとぬさうしと枕の山さ  
 宿さうしと配さうしとい慰ん  
 庶子さうしとゆつと一茶の船物  
 式とりさかたのふととらせく  
 海州一末の出る川  
 標子と願さうしとぬ夕すさみ  
 堂もしとゆさの管火のつけ  
 細力さうしとお里の姥の斬道ひ

足 嘆 扇 展 風 足 信 風 之 扇 風 足

十一きまらわのひと刺袖ひと  
 釣魚方すしとさきとゆの留さうす  
 阿うね尾おさうしとさうしと  
 氏人の衣園おゆふ花さうしと  
 智いととち統の妻さうしとさうしと  
 田もさうしとあさうしと山さうしと  
 かさうしとおおさうしと種さうしと  
 十一月廿四日みまのちと有し熱河お  
 御社さうしとひ指さ  
 磨直さうしと鏡さうしと鏡さうしと花  
 石さうしと鏡さうしと鏡さうしと

扇 執筆 行 風 意 嘆 展 扇 桐葉



時（ハ）松かきさきり風止まり  
 象鳩 陽（ハ）山のうけり  
 種（ハ）花（ハ）自（ハ）家（ハ）の（ハ）家  
 節（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 肌（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 （ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 破（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 古（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 物（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 松（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 雲（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）

葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

就（ハ）中（ハ）の（ハ）礎（ハ）（ハ）の（ハ）ゆ（ハ）め（ハ）あ（ハ）る  
 温（ハ）泉（ハ）の（ハ）あ（ハ）る（ハ）人（ハ）も（ハ）さ（ハ）さ（ハ）め（ハ）の  
 火（ハ）燭（ハ）の（ハ）女（ハ）の（ハ）志（ハ）は（ハ）な（ハ）ら（ハ）ず（ハ）の（ハ）れ  
 浮（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 新（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 中（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 糸（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 糸（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 糸（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 糸（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 糸（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 糸（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 糸（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）  
 糸（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）（ハ）

葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

おのうむ松も似たるを  
のうむの聲は虎目も  
秋山の秋松と告るるに  
そ一節をかりたる  
優遊寒の山廟つゝ  
故人 起す夜  
恋果すぬれ葉の  
の桶の  
石の  
喜の

葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

珠のや葉葉の  
信士の葉と  
山在の志  
跡を  
矢中  
天  
言の  
音の  
木  
と  
去  
放

如風 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

雲がけの籠 珠のまのまをこめ  
蝶けし 顔の軒のまのま 月  
秋や昔三子もけしるおととや  
吹りし きてけりまのまのま  
ちたつろ 葉見えくゆするまのま  
瘦しつろ 女まのまのま  
米りしにまの戸むつおのま  
山のまのまをけしるまのま  
わのまのまをけしるまのま  
うきまのまをけしるまのま  
夕のまのまの梅のまのま  
花のまのまをけしるまのま

雲 足 吹 風 竹 菊 辰 竹 風 足 辰 竹

いろまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
花のまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
貝のまのまのまのまのま  
新のまのまのまのまのま  
身のまのまのまのまのま  
母のまのまのまのまのま  
羊のまのまのまのまのま  
おのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのま  
原のまのまのまのまのま

雲 竹 足 吹 辰 菊 辰 竹 風 足 辰 竹

第根より人の心ししるもの  
 舟に焚火を入る本は紫  
 又六丁布細干き家尺し  
 柄杓はつた葎の中ゆく  
 的のまじしゆぬ力の極探通  
 勃くしを揚るをの夜  
 帷子に給雨おも秋めよ  
 食子臨くさか回令うら  
 神主も昔ハ大うをばし外  
 垢尺しすく藁のいれ  
 とわしとそはの法を朝物  
 子 如 野 越 若 執 愛 子  
 行 水 人 筆 華 翁 翁

浮中より念佛  
 忍心入戸をゆくと故の  
 つきなき統つる月々傘  
 長き靴をほくさみの音は  
 人子抱統るねをわうぬ  
 着の質干りし物衣を皺さ  
 手まき梅を裁る幕串  
 是より人へのわんまふて出  
 に物きんをみゆ  
 心こらほすま句は能  
 於燕鳴ふ人け真さよ  
 とらくと一扇入て月の受る  
 人 翁 水 人 翁 翁 翁  
 翁 翁 翁 翁 翁 翁

去もる市の理通りの

己後つくりぬる糸栗の首しと

手鬼足ししみの法村父

布袋破行次舟の結の如

松島四月

ひんちとく果れま文字を忘る人

妻戸にききこゆる跡の如

泣くしきわさくの留る果れぬ

河とく姿なり改そく思ひ

舟の中結原登交り了結いれ

成る糸をまらぬ結舟

旅衣尾張のむね十葉

水 篇 人 變 水 行 變 篇 人 行 篇

富士画いひて又ておの

結り重入り花ねりし

新和りうりし柳ありし

水 行 人

土月九日一井亭無り

旅衣のむねしおをいひて

衣さくさはくつりて

きわしと糸をいひて

残海を尺なりし

舟おのむねしおをいひて

起るさくさはくつりて

一井 教人 昌碧 豊年 楚竹 東膳

みよれー 髪のはねるひら  
おしきー 又ふけりるをのしき  
乳とのおるはあゝ似てし  
麻布を織ひしは織るひら  
菅をとりて火いねるを  
又まの矢子ゆゆの雷の  
ふもあつてぬ山隙の  
小男麻の着たを袖の付たを  
飛あつてはよあそびあつて  
木うー 只悴けりまめ二  
とくけりてくおひさるし

山 碧 号 人 翁 膝 竹 号 碧 人 舟 翁

錢別

時西くは程かきまん字の  
火焼の葉を 袋をつく人  
松風よそれく 物も尺の  
おきよハくき 湯の山は月  
降ひよのこりかよ秋の  
葛の縄面を ぬきれー文  
餅ニういし ぬきれー文  
うー ぶおちるまよ ねらえん  
誰ぬー けりて 踏すー 文

岸白 翁 溪石 口齋 其角 卜千 嵐雪 白 翁 石

同

志らうのひと 松をりそをの松の澄  
一羽わうのひと 子も一も松  
枯るのひと しの松のみと  
回井の松は通るそゆく  
月わそく松の松の松  
秋風上り門の半松  
春の系瑞を通る松の松  
雨のハスを松の松の松  
松松女松の松の松  
雲情うけを松の松の松

松江

菊

曾良

依

泥芹

水萍

風泉

夕菊

若草

紫華

下りの秋風高り松のうそを  
とらぬおむと松の松の松  
危を松

風瀑

菊

一品

翠花

虚洞

深川の松み色松の松の松  
喜松を松の松の松  
初雪の松の松の松  
松と松の松の松  
牛車松の松の松

菊

廿二角

おの松も母松の松の松  
香き松の松の松

いふしのおもひをさへさへ月夜

嵐雪

樹をよこす平たけあしすま  
秋もくまへくるるさよのきー  
月とんとはひよのほろおの

松江  
篇  
曾良

さき秋篇かたし人を待ひ三は  
越え片せしりるれは侍長古崎を  
さへ浪よすは決まはるひき  
ゆきかひかたきききき  
焼食やゆき古のきききき

知是

砂をこころしー新河の  
松をぬく力子果の子らー  
い川のさき片のゆけりき風  
ゆきやうすのゆきあきき  
くもりさかきり新河の月

篇  
越人  
足  
人

空照危子松の  
墨染や更子松ももをこれに  
さきももしあきり秋すのの松  
海士の子の解を告る貝吹き  
明戸より直子論こころし  
高よせんは名月を只年やハ

越人  
知是  
篇  
人  
足



夢美の頁をこゝ通る一冊也

一冊

宇治浪出羽守氏雲定より

一冊

舟もくろく一巻をよみおの  
舟もたつてく回舟の大徳  
舟つぎく岸の二股を枯る

自伝  
一冊

宇治浪出羽守氏雲定より

一冊

いく最葉をこれに神を定む  
秋のよのちをこゝろのあつた  
と秋の月をよみおの浪出羽守氏雲定より  
里のおとくりに秋の菊をよみ

野水  
一冊

市人よりいふことある  
酒の戸たつてく秋の枯梅

一冊

釣の浪出羽守氏雲定より

杜園  
一冊

雲定よりいふことある

如行

秋の文をよみおの浪出羽守氏雲定より

夕道

秋の文をよみおの浪出羽守氏雲定より

野水

秋の文をよみおの浪出羽守氏雲定より

一冊

秋の文をよみおの浪出羽守氏雲定より

一冊

秋の文をよみおの浪出羽守氏雲定より

一冊

麦藁くうや陸家やをくけり  
みごとさうりに山原笑ひ  
倉の忠孝やむねの福とて  
野人

翁

翁

いさくらハきんぎょ精ふきかき  
硯のふれおるお起  
同様の情しるぬいそきおれし  
三十餘年とて此無き  
阿比のゆきハ有の湯をゆく  
かや濁せけりやけりけりけり  
野人  
支那  
故江

翁

起例

翁

去芳

翁

益完

又玄

貞享五年戊辰年

何の本れ花をそくくみ月山に  
おろくしおろくをふくむき  
まほふ葉の指をそくくみ

江

二葉のすくはれし香きらら  
馬のふし我をまぬ引つてみ  
初を先ハ長き杖のゆき火  
泊折る一風のかきふき  
門はそ先なる回の中は古  
山は末く遠くすれは袖の汗  
杉子庵を色たのむか  
女のみ古おゆ館の破す  
棋を射つては活る  
のわすに海をくくは物心  
陣の仮ふり信の義  
白をすのむはたを折

平庵 勝延 清里 光 翁 色 野人 里 光

はめしえらるる玉は物  
さるぬを結、襟織とて  
二 藤 二 志みつく指のく  
神祇の信れ末の信色の地  
区をすつてはまぬの  
急務と地やめをお  
も終るは追手起  
たんと吸かきよの信の  
後りのものさう家  
あつらふ樂の一を  
約の王子は海は  
あつらふ華表は秋の

光 翁 色 野人 里 光

時あつては限り限香吹らつて  
 笑うけつてお毎の月を尺何しは  
 心とすさむ家か国をきえ  
 親らつて夢に能水とあはきつ  
 先初瓜を宋子代あす  
 は村を時きみやううし  
 ゆうこむ櫻子舟はあはき  
 ものぬらう弦を引控ぬ  
 らんさく跡手跡垣の雲  
 正永 人色

銭きぬぬもらん雨の花

翁

酔つたつては限り限香吹らつて  
 酒をやう船を棹に控ぬ  
 板屋のしりやううし  
 又そまお月を傘を干つて  
 了りぬ瓜を付くゆくと  
 秋空く宋一升子履行くと  
 膳守お椒のほらとさしき  
 吹けつて雨をぬけつて未申  
 夕子やうをうれお人  
 とあつては限り限香吹らつて  
 寺子やうをうれお人  
 寺の中を鶴の足下つて  
 乙孝 一有 杜園 應字 葛森 翁 小 囊 翁 字 森

あまのけしき... 幽霊... 八千... 念... 目... 八...

考 有 字 翁 翁 翁 翁

如行

あまのけしき... 萱草... 人の... 有... 植木... 物... 昼... 藤... ち... 鶴...

叩端 閑水 翁 桐葉 東蘇 工山 桂楫 執筆 行 瑞

梅子の橋のかけつゝうし  
愚態を手中にや、柳の徒  
かくきは又の袖に柳の徒  
際りの用ハ、うしをさるる  
一里まゝし、あや青柳の葉  
あやをさるるし、うしをさるる  
さるるし、あやのさるるし、  
あやのさるるし、うしをさるる  
二  
あやのさるるし、うしをさるる  
清義すまみ、うしをさるる  
さるるし、うしをさるる  
非人と、あやのさるるし、  
従うぬ、うしをさるるし、

水 翁 葉 夜 行 端 梅 山 麓 紫 翁 水

五寸と、あやのさるるし、  
うしをさるるし、うしをさるる  
やうしをさるるし、うしをさるる  
又、うしをさるるし、うしをさるる  
あやのさるるし、うしをさるる  
古是れ石のさるるし、うしをさるる  
うしをさるるし、うしをさるる  
あやのさるるし、うしをさるる  
不浄をさるるし、うしをさるる  
柳のさるるし、うしをさるる  
あやのさるるし、うしをさるる  
あやのさるるし、うしをさるる  
あやのさるるし、うしをさるる

行 山 麓 紫 翁 水 端 梅 山 麓 紫 翁 水

新し〜とわ〜く〜あ〜く

楫

蓋ももあ〜りあ〜りのさ〜ひり  
麦穂あひ〜り〜りあ〜ひの末  
二〜〜とま〜する鳥〜り〜れた  
う〜〜と〜しゆ〜も〜れ〜名〜記  
修〜れた〜有〜り〜海〜の〜浦〜修〜ひ  
〜れ〜と〜は〜り〜の〜秋〜の〜ゆ〜き  
於〜り〜と〜あ〜ふ〜麻〜の〜耳〜さ〜記  
念〜力〜あ〜も〜と〜ら〜ふ〜志〜〜〜  
そのま〜の〜松〜り〜一〜喝〜志〜あ〜〜一〜直

菊 知是 桐葉 叩端 葉言 自嘆 如風 出籠 重辰

長老の雲〜りあ〜と扱〜む  
あ〜り〜も〜あ〜ふ〜い〜部〜の〜く〜〜あ  
岸〜り〜か〜さ〜る〜八〜百〜の〜海  
葉〜透〜り〜神〜氣〜の〜あ〜つ〜幽〜あ  
子〜も〜わ〜も〜〜一〜親〜の〜有〜さ〜り〜  
〜花〜の〜秋〜す〜あ〜も〜あ〜の〜梅〜  
猫〜あ〜〜ハ〜猫〜を〜力〜を〜れ〜了〜  
〜部〜あ〜り〜あ〜と〜〜女〜花〜を〜け〜  
妬〜め〜〜す〜ら〜〜と〜ま〜を〜〜月〜  
〜と〜〜り〜短〜冊〜つ〜け〜〜と〜あ〜ら〜や〜  
龜〜さ〜〜つ〜ま〜〜は〜せ〜あ〜ま〜〜あ〜み  
天〜守〜〜と〜わ〜り〜龜〜〜〜と〜あ〜み〜

扇 足 紫 湯 足 扇 信

六十九

玉の如く此の言 雨は 昔  
葉子くまの木は 是の位は  
長玉の お面を名 初は 心  
足 嘆 風

同六月十九日

蓮池の井の 層の せき 一 更  
多 井の 一 更 一 更 一 更  
さ 多 井の 一 更 一 更 一 更  
肝の つま 一 更 一 更 一 更  
菊 葉子 一 更 一 更 一 更  
扇 子 小 窓 の 屋 一 更 一 更  
去 路 一 更 一 更 一 更

芳文

櫻 一 更 一 更 一 更 一 更  
古 多 井の 一 更 一 更 一 更  
取 一 更 一 更 一 更 一 更  
湯 一 更 一 更 一 更 一 更  
了 の 一 更 一 更 一 更 一 更  
次 多 井の 一 更 一 更 一 更  
子 一 更 一 更 一 更 一 更  
多 生 の 一 更 一 更 一 更 一 更  
塞 ぬ け の 一 更 一 更 一 更  
足 法 一 更 一 更 一 更 一 更  
つ ぬ け の 一 更 一 更 一 更  
秋 の 一 更 一 更 一 更 一 更

己百 楊樹 踏歩 捨原 用足 東巡 扇 人 又 号



然玉 餅 漿 百 漏 人 然 笠  
 文 巡 歩 系 呂 漏 人 然 笠

此のたをうけそ 茂かす  
 花さうさ 花さうさ  
 傳のめら 子持のつとむ 忠  
 二 守程のう 霜ふくし さま  
 既ゆけし 鞠子よなま ゆふ  
 みくろの 村の 梢の 枝の 葉  
 弁当 法の子 法の子 法の子  
 海を渡る 舟の 通の 法の  
 花をすちら けさる する けさる  
 手 株つく 船か けさる けさる  
 まえ 走る 走る 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る 走る

走る 舟の 丸の内 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る

舟の 丸の内 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る

舟の 丸の内 走る 走る  
 舟の 丸の内 走る 走る

は— 甲寅のうらわらふ 及 檜  
去るうら 檜の以干のせせ 貝  
風ひよふふあうのうら—  
うら— のうら— のうら—  
御階子ぬく— のうら— けふ  
本松うら花ちるあいの 翁 被  
懐海も— といふ 玉のうら— のうら

七月十三日 写海船室

袖秋や海もまき田の一みとを  
のうら— のうら— のうら— 月  
行府あはけのうら— のうら— 船と船と

翁

重辰  
知足

出 人 翁 杖 骨 餅

七十一  
二

獲くる 藪おけ 竹まき—  
塔のかう— ちみ— のうら— 砂子  
望ふ— のうら— 船と船と  
白雨のち— のうら— のうら—  
田面— ちみ— のうら— のうら—  
お氣— のうら— のうら—  
お— のうら— のうら—  
飛龍— のうら— のうら—  
物— のうら— のうら—  
折— のうら— のうら—  
龍鱗— のうら— のうら—  
深淵— のうら— のうら—

如風  
安行  
自又  
風  
足  
風  
吹  
翁  
辰  
辰  
翁  
風

七十一  
二

朽きくはくお由を研り  
花の香を扇より又きくお由  
あおのしるや寺のまは  
あまの橋ふくくお由  
白雲をきく嵐をきく  
昔のあまをきくお由  
くぬ一七の戸帳くく  
かくくお由のあまを  
あまのあまさん尺八の  
湯のくくお由を  
おのくくお由の  
あまのあまを

作 足 牛 歩 作 足 作 足 作 足 作 足 作 足

息はくお由を  
あまのあまを  
次おのくくお由の  
あまの子は親あまの  
あまのあまを  
あまのあまを  
あまのあまを  
あまのあまを  
あまのあまを  
あまのあまを

作 足 作 足 作 足 作 足 作 足 作 足

お竹葉軒無行  
粟稗子中

扇

藪の中よりとくはゆつた  
秋の雨かり初をわらう  
月あやみ山  
い  
移  
本  
は  
道  
香  
あ  
死  
石

長虹  
一井  
越人  
胡及  
氣彈  
崩  
切  
号  
井  
人  
及

義  
火  
走  
雨  
井  
出  
木  
色  
切  
き  
人  
控

浮  
翁  
井  
号  
号  
号  
及  
彈  
井  
人  
翁  
江

まゝにまゝにたれど鳥も鳴る  
ふらふら海子指さし指さす又  
戸をぬくぬく重の敷の亭  
早咲の梅を愛むにたれど  
嫁をぬ 娘の涙うらたれど  
まの心まゝすうきまゝす垣のたれ  
縮きやまきまゝ 松のともし火  
的やまゝ不敷をまゝすも。後まゝ  
何をもまゝにぬくはまゝにまゝにや  
菊もまゝに 硯のまゝに 物まゝに  
すゆれまゝに ちりまゝに 雪のまゝに

人 及 号 翁 浮 及 人 虹 翁 浮 虹

七十五

元禄元 九月廿九

いろく(の)菊と(は)くの(白)の(糸)  
松の(は)きと(ま)虎の(秋)  
赤丸(は)まの(舟)の(新)え(ま)  
是の(ま)や(ま)ま(人)の(ま)え(ま)  
是(ま)れ(ま)の(後)を(ま)ま(ま)  
少 揚(ま)の(糸)の(ま)ま(ま)  
は(ま)の(ま)を(ま)ま(ま)の(ま)  
芥子(は)ま(ま)の(ま)ま(ま)村  
被(ま)の(ま)ま(ま)の(ま)ま(ま)  
は(ま)利(ま)の(ま)ま(ま)ま(ま)  
精(ま)の(ま)ま(ま)の(ま)ま(ま)

叩 瑞  
桐 葉  
翁  
事 露  
上 山  
閑 水  
瓶 筆  
瑞  
紫  
翁  
庭

七十六



暮るる海に先きの月を  
葉

あつた月をさかへて  
松風

泥のうらみしつゆを  
越人

月何と海をたふさぐ  
翁

望みし玉子を  
蒼翠

少くもとわてわのき  
友五

あつた月をさかへて  
名菊

海舟をさかへて  
依人

荒れゆく海を  
泥芥

左義長の火を  
人

かゝる庭を  
風

觸るる月を  
翠

あつた月をさかへて  
五

香のまじり物の  
依人

小袖もたむかる  
風

洗義のついでに  
人

あつた月をさかへて  
翁

望みし玉子を  
五

少くもとわてわの  
蒼翠

あつた月をさかへて  
名菊

蒼翠  
越人

物より一休菜垣の極  
此君と名をいふ世の事なき  
中川に伝名ゆいるは智心  
南よりあつたふりなき  
ふもきそこのまゝのまゝ  
折とくはめかけのまひ  
女房もはたはるまゝ  
就身と物とくすの友  
猪神とていふまゝ  
まの牛ぬまの戸の  
まの牛ぬまの戸の  
秋風やまをたぬまのま

菅翠  
友五  
光芹  
人  
五  
翠  
人

管の産はあまのま  
り月よりおと経し一  
仲よりお足り敷  
唐人の活中子花の  
破る牛より青のま

依  
菊  
菊  
菊  
菊

涼川の歌

月よりおと経し一  
酒きいふくふ  
着るる月と露  
理をまはたす  
秋のま

人  
人  
人  
人

秋のま



風子 吹花 帰 市人  
何よりと長安にこれより利の終  
際のおちおちのくすくすの  
いそいそと沙色のやまをむく  
ひくくはやく寺の法  
けりていふ言のきききききき  
足跡さうせぬ 宙のゆけりの  
きぬくやあまのくすくすや  
風ひくくあまのくすくす  
またつとす 宙のゆけりの  
物残るきぬ舟のあまのくすくす  
月と色は言のきききききき

人 人 人 人 人 人 人 人

あまのくすくすのくすくす  
破れ戸の新あけのきききき  
足ぬきききききききききき  
匣あまのくすくすのくすくす  
物さのくすくすのくすくす  
人さのくすくすのくすくす  
初あまのくすくすのくすくす  
好まのくすくすのくすくす  
垣あまのくすくすのくすくす  
あまのくすくすのくすくす  
あまのくすくすのくすくす  
ゆく月あまのくすくすのくすくす

人 人 人 人 人 人 人 人

七  
九

姑もきく難く居候  
 秋の國を新きぬらるれば引  
 さひくもあつて文字に未  
 けのちりく瓦底の本葉  
 院もする子の瘦くあひま  
 花の傍流義すあつて  
 田りもさるる解ゆ

人 人 人 人 人 人

大通虎尾追善

手かからとそや枯木の枝の長  
 子身未し候す恒の地  
 義ゆりみのゆりすす向止

善 善 善 善 善

風のききりあつて物の音  
 内洞のくけのあつて内  
 油のあつてけつきのあつて  
 包めともやし冷る物らひく  
 手もあつてぬあつてとく  
 君ハ未し候す物の本もあつて  
 ありとつてし念佛のあつて  
 いけりあつて央うてあつて  
 隙もあつて起すあつてあつて  
 義の内風あつてあつてあつて  
 地子新葉あつてあつてあつて  
 拾ちられぬあつてあつてあつて

友 友 友 友 友 友 友 友 友 友

青理すゝき少を可斤一河坊  
崎の紙花の岩屋まつらふ  
此ふつ小船を汲ん岩川  
二 石を舟の隠れと集くは水し  
鳥の保くろをもくやむ乙子  
森をむらゝくきふ管の内  
猿ハ木末叶松うらも 女  
若生し 佛の膝を枕し  
言ふとおもひて是うぬき  
振袖子ソウきしあむ月影  
無しくぬすむ葉の一株  
そは海ふ舟の傳の戸をゆ

良通五嬰通篇 菊週菊良五篇

舟のき代を可斤一河坊  
位前もつら高のまきれあ  
奈良平も如ぬ伝舟きん  
酒を名うけしハ人き悟  
春をももむぬ庭の砂ん  
くみぬくの海堂の船舟ありし  
故すきしと色くかふた及櫻  
清き地子骨をも破つてのうけ  
まききくゆく香の一對

良通五嬰通篇 菊週菊良五篇

きのぬハ古丁の流子香まき

流通

花鳥をとりん梅井早  
赤渡り外面を酒の食干  
智馬しゆく旅をのち  
料のゆく水の長流り  
火を焚き火をさし  
てしゆく操り虫のあ  
節のゆくちゆくま  
生流り尺ふくま  
親ゆくゆくゆく  
去のさわき舞も  
蔓のゆくゆくゆく  
不二消ゆゆくゆく

宗波 友五 翁 盛水 又翁 水 良 通 波 五 翁

母の佛 浅流り  
花柳の白流の桶を  
溜りをさす砂川の  
花もすゆくゆくゆく  
破れ扇の骨を  
袖紗をさし  
後ゆくゆくゆく  
さんと子娘の  
いやいや  
おふくゆくゆく  
ゆくゆくゆく  
菊原ゆくゆく

水 五 通 菊 五 通 菊 水 五 通 水 菊 五 通 菊 良 水

花よりぬきと吐きし  
秋山より山吹花の  
くまの人もあつたけし  
おもしろい物もある  
心もけしきり入る  
文字のつづき  
おもしろい物もある  
仲もほろり  
百りあつたけし  
花よりぬきと吐きし  
美よりぬきと吐きし

菊 五 通 良 菊 通 水 菊

花よりぬきと吐きし  
秋山より山吹花の  
くまの人もあつたけし  
おもしろい物もある  
心もけしきり入る  
文字のつづき  
おもしろい物もある  
仲もほろり  
百りあつたけし  
花よりぬきと吐きし  
美よりぬきと吐きし

出水  
菊 通 良 菊 通 水 菊  
友 曾 宗 嵐 雨 夕 縁 通

カもらすりかきり一徳  
故きれくねりうむ牛の夕陽  
片うえり降る松の稲妻  
あけの傍をおする海の月  
径の傍りむ碑の塔の奇  
長生を朽木の花の極まて  
まのまのいり母名をうら  
館をたぬをわくのまの里  
神火帯押る花かきり  
母のまの寫とや中んまのし  
九輪ハ有るまの石の塔  
一かみのねりこく海と吹

五良五竹涼通良洞波水五菊

むろろこりりも秋まの月  
秋まの月を秋と秋の法のか  
秋まの月を秋と秋の法のか  
こくねり手給る入る故帳の内  
松の小道をまのけまのん  
そまのり割る傍を海の花  
生木を極るまのりまのり  
かきりハ袖まのりまのり  
梓四子人かきりまのり  
昔まのりまのり尺の無ゆを  
海まのりまのり小猿まのり引  
優婆塞まのりまのりこく快

五良通菊涼通良水竹菊

麻の羽衣平はくまの次 菊

歩おめ二尺の七五三を季の音  
藤竹うらむ上棋掃の海  
鶴うら懐の小口あそびて  
村の地取うらおこす秋  
弘美の湯の湧もく峰の月  
葉をさきおれ方上核とふ  
あつとぬき舞の里の菊  
まきまきまきまきまきまき  
三味線をも焼くまきまき

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

はくまのつゆの 楓のぬむら  
藤竹うらむ上棋掃の海  
鶴うら懐の小口あそびて  
村の地取うらおこす秋  
弘美の湯の湧もく峰の月  
葉をさきおれ方上核とふ  
あつとぬき舞の里の菊  
まきまきまきまきまきまき  
三味線をも焼くまきまき

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

あふさかりにあふさかひささふ  
男多し妹、すくれをささしひさ  
涙欠梅干鼻張もあふさ  
老ゆ花、針のこしすの背ける  
子あうう、傍はさうしきさや  
雫のあふさ、茶碗二ハもささる  
ゆきうみさ、さく、桜ささるし  
甲斐信濃、身をゆきさ湯の海  
雲とらされ、さあ、ゆき

通菊 五菊 水通 良波 五

系、宇よ梅、うたぐの義、桂

雅良

系、湯干、妹、ささるしひささ

菊

ささるしひささ、梅、ゆき  
妻のささるしひささ、ゆき

菊 抄丸

二人、ささるしひささ、瓜  
裁物の麻のきれ端、快ひさ

菊 関情 其角

八十二



きんしん... 巳百  
翁

翁のいけか... 翁  
翁

林鍾十七日  
何... 寸木  
翁

あつ... 越人  
翁

え... 悦然  
翁

笑新翁  
知是  
安住

風を懐く月あり月あり  
秋頃の宿ありては漢の地あり  
和泉の地ありては純子あり

篇  
足  
作

ひらりとと秋風けしむる  
暮菊の心ありては秋あり

篇

木のくさしは空をまきしよ  
よのちをけしむる空あり  
野のありしは垣根の錯をまきしよ

篇  
換

篇

篇

春のけしむる空ありては  
よのちのありしは人の影あり  
みふとては舟ありては春

人  
越

空  
羽

泉  
舟

此乃...  
 乃...  
 乃...  
 乃...

